

どのような設問が文章理解の促進につながるか

—読解に困難を抱える中級日本語学習者を対象に—

山田裕美子

1. 問題の所在と目的

教育の現場では、文章を読み、その内容が理解できているか否かを測るものとして設問が用いられている。この設問は試験の際の測定に用いられるものや、授業の中で理解に必要なポイントとなる点を教師からの発問という形で与えられるものもある。試験の設問の場合、「文章を読む前にまず設問を読みなさい」と指示することは教育現場でもよく行われていることであり、あらかじめ設問の内容を把握することにより、読みの目的が設定され、効率よく読むことができる。授業での発問の場合でも、学習者はたずねられた部分に意識が向き、理解が促進されると解釈される。

日本語教育の先行研究からも、設問が文章理解に有効であるとの見解が示されているが（金城・池田 1996、佐藤 2001、館岡 2001）、設問の質の違いによる読み手の過程的な理解を検討したものに、山田（2016b）がある。山田（2016b）では、設問のタイプの違いにより読み手のストラテジー使用にどのような影響が及ぶのかを中級日本語学習者を対象に分析しており、局所的な理解を問う設問よりも、広範囲の理解が求められる設問において、自己の理解を表明する「解釈・説明」ストラテジーや、本文の論とは異なる方法で情報を再構成する「情報の再構成」ストラテジーが活性化されており、読みの目的に応じて自身の読み方を変えていることが分かっている。しかし、使用するストラテジーの種類を量的に測るだけでは、設問によって読みの理解過程が具体的にどのように影響を受けるのか明らかにならない。

また、設問が文章理解に有効であるならば、読みの発達段階にある学習者の読解を促進するためにはどのような設問を与えるのがよいのかを検討する必要もある。これまで、読解成績の良い学習者の読解処理過程に焦点を当てることにより効果的な読解指導を論じることが多かった（館岡 2001、菊池 2006 など）が、読解成績不振の学習者にとって有効な指導は何かを探るためには、まずは彼らの文章理解過程が設問によ

うどう影響され、何が問題となって理解が進まないのかを詳細にみていく必要がある。

そこで本研究では、発話思考法¹と筆記再生法²を用いた調査により、設問タイプの違いが中級日本語学習者の文章理解過程にどのような影響を及ぼすのかを、読解に困難を抱える学習者に焦点を当てて質的に検証することを目的とする。具体的には、調査で行った筆記再生課題での成績が下位の学習者が、異なるタイプの設問を与えられた際に読み方にどのような変化が見られたのか、その実態を記述し、その原因及び読解指導の示唆を述べたいと思う。

2. 研究方法

2.1 対象

対象としたのは、都内の民間日本語学校に在籍する留学生 13 名、国立大学に在籍する大学院研究生、交換留学生、日本語・日本文化研修留学生（日研生）、学部生 7 名の計 20 名（男性 6 名、女性 14 名）。日本語レベルは、大学院研究生が中級前半（旧日本語能力試験 3 級合格程度）、日本語学校生と交換留学生、日研生、学部生が中級後半（同 2 級合格程度）であった³。被調査者の出身国および人数の内訳は、韓国 10 名、中国 2 名、台湾 2 名、オーストラリア、フランス、ロシア、ポーランド、ブラジル、キューバが各 1 名であった。

2.2 方法と手順

2.2.1 材料文

日本語の新書、文庫本から「子どもはピカソ（以下、「子どもの絵」）」（山口 2007）と、「禁煙のはずのトイレに灰皿があるのは、なぜ？」（以下「トイレの灰皿」）」（ウィパー 2005）の 2 種類を、それぞれ被調査者の言語能力に合わせ、日本語能力試験旧 2 級程度となるよう一部修正した（稿末資料 1 を参照）。「子どもの絵」は 854 字、22 文、「トイレの灰皿」は 908 字、22 文からなる。日本語文章難易度判別システム⁴によるリーダビリティスコアは、「子どもの絵」が 2.97、「トイレ

¹ 文章を読む際に、読み手の頭に浮かんだことを全て声に出して語らせることで、読みの過程を分析する方法

² 文章を読んだ後に、その内容を想起し筆記させることで、読みの理解度を測定する方法

の灰皿」が3.36で、いずれも中級後半の判定であった。「子どもの絵」は、子どもが頭から手足が出ているような絵を描くのは、認識能力の発達に関係しているという内容である。また「トイレの灰皿」は、禁煙である飛行機のトイレに灰皿があるのは機内で喫煙できた時代の名残であるが、トイレで隠れ喫煙をする乗客による火事を防ぐために現在も灰皿を残してあるという内容である。

本調査では漢字を読む能力を問題としていないため、文章中の漢字には、初級レベル以外のものには全てひらがなでルビをふった。文章以外に、タイトル、絵、語彙リストなどは載せなかった。そして、それぞれの材料文に2.2.2で述べるA～Cタイプの3種類の設問を設定した。調査用紙は、A3サイズ用の紙を見開き2ページとし、左側に問い、右側に文章を印刷して使用した。

2.2.2 設問タイプの設定と被調査者の割り当て

設問は、文章を理解する上での情報の照応という観点から設定した。テキストを読んで理解するということは、文と文との関係を意識し、それらの意味を結びつけ、テキスト全体の意味として統合する必要がある。統合する情報の範囲が狭いものであれば、文章の理解は局所的な構築となるが、統合の範囲が広がれば、その理解は全体的なものとなる。仮に読み手が設問を手がかりに理解を深めているなら、設問によってテキストの情報をどのように結びつけ、理解を構築するかということにも影響が及ぶと考えられる。そこで、今回の調査で用いる設問は、解答する際にテキスト中のどの情報とどの情報を結合して意味をまとめ上げるかという点に注目し、そのまとまりの範囲を比較的狭い範囲から広い範囲へと段階的に3種類設定した。それらは、Aタイプ(狭範囲照応問題)、Bタイプ(広範囲照応問題)、Cタイプ(記憶照応問題)である。

Aタイプの「狭範囲照応問題」は、局所的な理解で解けるもので、下線部が指す意味を問う問題である。答えは下線付近に明示されており、文章の前後を参照すれば解答できる。Bタイプの「広範囲照応問題」は、Aタイプと同様に下線部の意味を問う問題形式であるが、答えは下線部から離れた箇所があり、段落を超えた意味の理解ができないと解答できない。また選択肢は本文中の表現を言い換えてある。Cタイプの「記憶照応問題」は、「～について合っているもの／合っていないものはどれか」といったテキスト全体の意味を統合しなければ解けない問題である。また、解答形式は多肢選択式とし、設問数はAタイプを4問、B

タイプを3問、Cタイプを2問設定した。

以下は、設問A～Cタイプの例である(「子どもの絵」からの抜粋)。

Aタイプ(狭範囲照応問題)

下線部「頭足画」とは何か。

1. 不思議な人の絵を描いた絵
2. 頭と手足がない絵
3. 子どもたちが漫画をまねして描いた絵
4. 人体の形をまったく無視した絵

Bタイプ(広範囲照応問題)

下線部「卵を半透明にして中に鳥の子どもを描いたりするような絵」を描くのはなぜか。

1. 見えないはずのものが子どもには実際に見えているから
2. 子どもは自分でイメージしたものを描いているから
3. 子どもは外の世界をそのまま写して描いているから
4. 子どもは認識能力が発達しているから

Cタイプ(記憶照応問題)

本文の内容と合っているものはどれか。

1. 子どもが描く太陽は写実的である
2. 子どもの絵には外界を認識する能力の発達があらわれている
3. 絵とは、写実的に描くことが大切である
4. 子どもは実際に観察できないようなものを本当に見ている

被調査者には、2つの材料文に対してA～Cの中から異なるタイプの設問をそれぞれ1種類ずつ、計2タイプの設問を割り当てた。

2.2.3 調査方法

調査は個々に被調査者と対面式で行った。まず調査の概括的な説明を行った後で、短いテキスト文を用いて発話思考法の練習を行った。被調査者には、テキスト文を音読しながら頭の中で考えていることを逐次報告するよう指示した。被調査者が思考発話を十分行えるだろうと判断した時点で練習を終え、調査を開始した。手順は、①設問を黙読する、②設問を音読しながら思考発話をする、③テキスト文を音読しながら思考発話し、設問に答える、④2つ目のテキスト文を読む(①～③の手順)、⑤テキスト文と設問の紙が回収され、

³ 調査の実施時期は、2008年5月から8月であった。そのため、レベル判定の基準は当時の旧日本語能力試験に従った。

⁴ 日本語文章難易度判別システム <http://jreadability.net/> (2016年11月アクセス)

読んだ文章の内容について覚えていることを全て母語で筆記再生する(全文再生)、⑥事後インタビューの順に行った。本調査は、被調査者が設問を先に読み、その内容を十分頭に入れておくことを前提とするため、手順の①②の設問部分は、黙読、音読しながらの思考発話を計2回行うこととした。手順③の設問への解答は、テキスト文を読んでいる最中に設問に答える、テキスト文を読み終わってから設問に答える、のいずれでもよいとした。思考発話をする際の被調査者の言語は、日本語、母語のどちらでもよいとしたが、実際にはほとんどの被調査者は日本語で発話し、表現できない場合だけ母語で発話を行っていた。手順②～④および⑥の被調査者の発話音声は、すべてICレコーダーで録音した。

被調査者一人につき、2種類の材料文(「子どもの絵」「トイレの灰皿」と、それに対して異なるタイプの設問2種類を割り当て、調査を行った。材料文の種類と設問の組み合わせ、実施の順序はカウンターバランス

をとった。

被調査者一人あたりの所要時間は、読解中が約30分×2種類の材料文で1時間ほどであり、説明や事後インタビューを含めて一人約1時間半から2時間程度であった。

2.3 分析対象と手順

2.3.1 発話音声データ

発話音声は全て文字化し、このうち本文の発話思考の部分を読解ストラテジーと認定し、発話機能からコーディングを行った。コーディングには菊池(2004, 2006)、Kamhi-Stein(2003)を参考にし、20項目に分類した(表1)。①～⑤は理解の処理過程でいう「低次処理」、⑥～⑬は「高次処理」、⑭～⑳は読みをコントロールする処理に当たる⁵。

ストラテジーの分類には、筆者の他に2名(日本語教育の大学院を修了した日本語母語話者)が独立して行い、3名の不一致部分は筆者が調整し再度評定した。

表1：読解ストラテジーの詳細

①解釈・説明	自分が理解した節や文の内容を別の表現を用いて説明する。
②置き換え	単語の意味を他のことばに機械的に変換する。母語などの他の言語に翻訳しているものもこれに含む。
③語義の推測	未知語について、その意味を推測する。
④文法の確認	機能語の意味を考える。また、主語や動詞などを探して文の構造を確認したり、活用を考えたりする。
⑤漢字の読み	漢字の読み方を考える。
⑥先行文脈とのつながり	今読んでいる内容に対し、既に読んだ内容と結びつけながら考える。指示語が表す内容を考えたりするものもこれに含む。
⑦情報の再構成	「Aの前にB」という文から「Bの後でA」のように、本文の論の進め方とは異なる方法で再構成し、理解を確認する。
⑧内容の精緻化	読んでいる内容に何らかの情報を加え、さらに詳しくする。
⑨世界知識	読んでいる内容に対し、連想される世界知識を結びつけて考える。
⑩予測	今読んでいる内容から、このあとにどんな内容がくるかを考える。
⑪内容に関する疑問	読んでいる内容に対して、「どうしてそうなのか」などの疑問を述べる。
⑫感想・意見	読んでいる内容に対して感想や意見を述べる。
⑬テキスト構造の確認	テキストの論の展開や重要情報についてコメントする。
⑭モニター	自分の読みの方略について述べたり、自分の読みの理解を確認する。
⑮保留	分からない部分をそのままにして、結論を出さない。
⑯設問への意識	本文読解中に設問を意識し、コメントする。
⑰設問への解答	設問の選択肢を選んだり、どうしてその答えなのか理由を述べたりする。
⑱再読	本文を始めに音読する以外に、今読んでいる文を複数回読み返す。
⑲読み戻り	今読んでいる文よりも前に戻って読み直す。
⑳読み飛ばし	本文を部分的に読まずに飛ばす。

2.3.2 筆記再生データ

読解後に行った「筆記再生」のデータは、個々の理解を判定するために用いた。データは母語で書かれているため、原文に忠実となるよう日本語に逐語訳した後、「文章の要点が記述されているか」、「要点の背景(エ

ピソードやその時間的な経過など)が適切に記述されているか」、「文章の整合性(誤った情報が記述されていないか、話の流れがスムーズかなど)」の3点を評価基準とし各5点計15点で採点した。採点には筆者の他に2名(日本語教育を専攻とする大学院修了者)

⁵ 山田(2016b)では、①～⑤を「構築処理」、⑥～⑬を「統合処理」、⑭～⑳を「読解制御」と名付けている。

が独立して行った。各項目において判定者間で3点以上の開きがあるものについては協議により解決し、三者の平均値で得点化した。最終的な順位は2つの材料文の得点の平均で決定した。

3. 分析と考察

3.1 評価の得点結果

2.3.2の評価の結果、被調査者間で得点(平均)に開きが見られるところで区切り、下位者4名を認定した⁶(詳細は稿末資料2を参照)。

下位の4名の結果(表2)をみると、AタイプとBタイプの設問を与えられた学習者9、11は、いずれもBタイプで得点が高くなっており、またAタイプとCタイプを与えられた学習者5ではCタイプが、

BタイプとCタイプの設問を与えられた学習者10ではBタイプで相対的に得点が高くなっていることが分かる。つまり、 $A < C < B$ の順で評価が高くなるが、Bタイプで評価が高いのはなぜだろうか。また、学習者5、10は設問の違いによって得点に倍以上の開きが見られることから、設問によって理解が強く影響されているといえる。本研究では、異なるタイプの設問による読み方の影響を検討することが目的であるため、設問の違いによって得点に大きな差異が見られた学習者5をAタイプ・Cタイプの組み合わせの設問を与えられた者として、学習者10をBタイプ・Cタイプの組み合わせを与えられた者として、下位者の分析対象に取り上げ、設問の違いによる読みの過程を発話データを用いて詳細に見ていくことにする。

表2：得点16～20位の被調査者プロフィールと評価の得点

順位	ID	国籍	性別	所属	設問タイプと評価		平均
16	7	キューバ	男性	大学院研究生	A (4.3)	B (7.7)	6.0
17	5	韓国	男性	日本語学校生	A (1.7)	C (8.0)	4.8
18	9	韓国	女性	日本語学校生	B (4.7)	A (4.0)	4.3
19	10	韓国	女性	日本語学校生	B (4.3)	C (2.0)	3.2
20	11	韓国	男性	日本語学校生	B (3.3)	A (2.7)	3.0

しかしながら、AタイプとBタイプの組み合わせの設問を与えられた学習者9、10については設問の違いによる点差が見られず、また、下位者4名の国籍が韓国に偏っていることから、得点の開きが3点以上みられた16位のキューバの学習者7をAタイプ・Bタイプの組み合わせを与えられた者として分析の対象に追加することとした。

3.2 下位者の読みの理解過程

以下では、下位者の文章の理解過程について、発話データから抽出したストラテジーと具体的な発話内容を中心に分析・考察していく。上記の3名の各設問で文章を読んだ際の使用ストラテジーの個数及び割合を予め表3(平均の低い順に左から配置)に示す。

(1) 学習者10の事例

学習者10はBタイプとCタイプの設問を与えられ、文章を読んでいる。

Bタイプの場合、【解釈・説明】が17回、全ストラテジーの42.5%と半数近くの割合を占めている。次に多く見られるのが【先行文脈とのつながり】であり、合計7回、全体の17.5%を占める。この2つのストラテジーは発話の中で連鎖した形であらわれることが多

く、合計5回出現している。

表4の発話データでは、発話番号5で「3歳くらいの子どもが描く人の絵は、～」の本文の頭足画についての説明を音読し、6で頭足画を「なんか、人間の形じゃない」とコメントする。そして、32で「大人の目からすると変な絵だが」の部分を読み、前の5-6の「子どもの描く人体の形を無視した不思議な絵(頭足画)」の情報と結び付け、「大人の目からすると、なんか人間な形(注：人間の形)じゃないから変だと大人は考えている」とコメントし、自らの解釈を述べている。同様に、本文音読部分の39で「写實的に絵を描く前に、イマジネーションが爆発する時期があるのだ」から、「イマジネーションが爆発する時期」を前出の「3歳くらいの子どもの頭足画を描く時期」と結び付けながら理解を述べている。このように【先行文脈とのつながり】と【解釈・説明】が重なってあらわれることから、前に読んだ文との意味の繋がりを意識しながら読んでいることがわかる。

また、【解釈・説明】が特に設問の下線あたりで活性化している。つまり、下線が近づくと設問を意識し、きちんと自己の理解を表明しようとして、この【解釈・説明】ストラテジーが働くのだと思われる。

⁶ 被調査者間で得点(平均)に1点以上の開きがあるところでそれぞれ上位、中上位、中下位、下位と認定した。

表3：下位者の使用ストラテジーの個数 ()内は割合

	学習者 10		学習者 5		学習者 7	
	B タイプ	C タイプ	A タイプ	C タイプ	A タイプ	B タイプ
①解釈・説明	17 (42.5)	3 (9.7)	1 (1.4)	7 (11.9)	5 (7.6)	13 (11.7)
②置き換え	0 (0.0)	0 (0.0)	11 (15.1)	11 (18.6)	2 (3.0)	5 (4.5)
③語義の推測	0 (0.0)	2 (6.5)	2 (2.7)	2 (3.4)	0 (0.0)	7 (6.3)
④文法確認	1 (2.5)	0 (0.0)	1 (1.4)	3 (5.1)	1 (1.5)	0 (0.0)
⑤漢字の読み	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (4.5)	3 (2.7)
⑥先行文脈とのつながり	7 (17.5)	0 (0.0)	2 (2.7)	1 (1.7)	0 (0.0)	2 (1.8)
⑦情報の再構成	1 (2.5)	4 (12.9)	1 (1.4)	2 (3.4)	0 (0.0)	2 (1.8)
⑧内容の精緻化	3 (7.5)	1 (3.2)	3 (4.1)	3 (5.1)	1 (1.5)	8 (7.2)
⑨世界知識	2 (5.0)	4 (12.9)	0 (0.0)	2 (3.4)	0 (0.0)	3 (2.7)
⑩予測	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑪内容に関する疑問	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑫感想・意見	1 (2.5)	6 (19.4)	2 (2.7)	2 (3.4)	0 (0.0)	1 (0.9)
⑬テキスト構造の確認	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑭モニター	2 (5.0)	1 (3.2)	10 (13.7)	4 (6.8)	3 (4.5)	7 (6.3)
⑮保留	4 (10.0)	4 (12.9)	0 (0.0)	3 (5.1)	11 (16.7)	18 (16.2)
⑯設問への意識	0 (0.0)	1 (3.2)	8 (11.0)	3 (5.1)	6 (9.1)	3 (2.7)
⑰設問への解答	0 (0.0)	2 (6.5)	4 (5.5)	3 (5.1)	6 (9.1)	6 (5.4)
⑱再読	2 (5.0)	3 (9.7)	9 (12.3)	8 (13.6)	28 (42.4)	33 (29.7)
⑲読み飛ばし	0 (0.0)	0 (0.0)	17 (23.3)	2 (3.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑳読み戻り	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計 (%)	40 (100.0)	31 (100.0)	73 (100.0)	59 (100.0)	66 (100.0)	111 (100.0)

表4：学習者 10 設問 B タイプでの発話

No.	ストラテジー	発話
5	本文音読	3歳くらいの子どもが描く人の絵は、人体のからだ形をまったく無視したもので、頭から手と足が出ていて、胸やお腹の部分がない。
6	解釈・説明	あれ？うん、人体の形をまったく無視、人の、なんか、人間の形じゃない、頭から手と足が出ていて、胸やお腹の部分がない、ま、3歳くらいだから。
(中 略)		
32	本文音読	大人の目からすると変な絵だが、「もっときちんとした絵を描いて」とこのような絵を描くことを禁止して、
33	先行文脈とのつながり	あ、大人から見ると、なんか人間な形(注：人間の形)じゃないから、変だと大人は考えているんですけど、
34	解釈・説明	おとな、大人が子どもにちゃんと絵をかきなさい(注：かきなさい)というのは、いっさい禁止して、
35	本文音読	②むりに写実的な人物画を描くように言ってはいけない。
36	解釈・説明	あ、むりして、事実のいうものを、なんか想像、想像できないように、できないように、ちゃんとかきなさい(注：かきなさい)とか、言ってはだめだと、今、言っています。
37	本文音読	絵は、写実的に描くことがいいわけではないのだ。
38	解釈・説明	あ～、それがいい、よくない、っていう意味。
39	本文音読	写実的に絵を描く前に、イマジネーションが爆発する時期があるのだ。
40	先行文脈とのつながり	あ～、前の3歳ぐらいの、頭足画は、その時期は、
41	解釈・説明	なんかイマジネーションが発達する時期だと思えます。

一方、Cタイプになると、【解釈・説明】が全体で3回しかあらわれず、また、【先行文脈とのつながり】は全くみられなくなる。その代わりに【感想・意見】【情報の再構成】【世界知識】の割合がBタイプに比べ高くなるが、そのコメントは局所的な理解に留まり、文章の話の流れを掴めていないように思われる。

表5の発話データでは、9の「以前、客室座席の一部に喫煙してもよい座席があった。」から、自分も日本の映画を観た時に電車で喫煙しているのを見た自身の経験を述べているが、以前は飛行機の客室座席が喫煙席と禁煙席に分かれていたことを当初きちんと読み取れていない。その証拠に次の11「…、その時代でも、他の座席や通路、さらにトイレも絶対禁止だった」の文を読み、「あれ？」と同じ箇所を再度読んだ後、「よく分かりません」と理解を保留しており、さらに

次の「しかし、喫煙席の乗客の中に…」の文を読んで初めて15「あ、前は喫煙と禁煙が分かれてあったこと、かな」と喫煙席と禁煙席に座席が分かれていたことに気づいている。しかし、当該部分の「喫煙席の乗客の中に、うっかりタバコを持ったままトイレに入ってしまう人がいた」についての理解の発話は何もなく、喫煙席の乗客とタバコの灰皿の存在の繋がりをきちんと理解していないように思われる。

この文章は、飛行機のトイレ内に灰皿がある理由について述べているもので、喫煙席が設けられていた時代でも機内全面禁煙になってからも、航空会社はトイレでうっかり（または、隠れて）喫煙する乗客による火災を防ぐために灰皿を設置しているという内容だが、禁煙になる前と後での灰皿の理由は微妙に異なり、出来事の時間的な経過を理解する必要がある。

表5：学習者10 設問Cタイプでの発話1

No.	ストラテジー	発話
9	本文音読	以前、客室座席の一部に喫煙してもよい座席があった。
10	世界知識	あー。なんか映画で見たんですけど、日本は、電車じゃなくて、なんかtrain?のときの中でも、なんか喫煙ことができた。見たんですよ。
11	本文音読	そこでの喫煙だけは許されていたが、その時代でも、他の座席や通路、さらにトイレも絶対禁止だった。
12	再読	あれ?そこでの喫煙は許されていたが、その時代でも、他の座席、
13	保留	あれ?よく分かりません。
14	本文音読	しかし、喫煙席の乗客の中に、うっかりタバコをもったまま?とったまま?あ、持ったままトイレに入ってしまう人がいた。
15	情報の再構成	あ、前は、喫煙と禁煙が分かれてあったこと、かな。
16	本文音読	持ち込んだタバコの処分に困り、トイレのなかにでも捨てられたら大変である。
17	感想・意見	うん。大変だ。
18	本文音読	そこで、そうしたケースにタバコを捨てる場所として、灰皿がとりつけられていたわけだ。
19	情報の再構成	あ〜。なんかお客さんがよく忘れるから、灰皿がそのまま残ってあるんじゃないかなと。
20	本文音読	いまだにトイレに、
21	再読	いまだにトイレに、
22	本文音読	灰皿があるのは、その名残である。
23	保留	なごり。ま、よく分かりません。

表6は、学習者10の機内禁煙になってからの説明部分の発話データであるが、出来事の経過を把握するような解釈は述べられていない。

35の「機内全面絶対禁煙」となってから、トイレの灰皿をとり去ることも考えられた」の文を音読した後の36の発話は「とり去る」の意味を考えるのみで

表6：学習者10 設問Cタイプでの発話2

No.	ストラテジー	発話
35	本文音読	「機内全面絶対禁煙」となってから、トイレの灰皿をとり去ることも考えられた。
36	語義の推測	あ、とり去るは、なんか、残らなくて、それをはずすこと、かな、と。
37	本文音読	しかし、現実にはトイレで喫煙する乗客がゼロにならないかぎり、灰皿を除去できないと、航空会社は判断したのである。
38	設問への意識	ここを読んで、機内全面絶対禁煙の言葉が出たから、私がそう、問題を読みます。(問い1の選択肢を順番につぶやき読み)

あり、次の37の「しかし、現実には…航空会社は判断したのである」の文では38「(一つ前の)「機内全面絶対禁煙」の言葉が(先に読んでいた設問の中に)出たから、私がそう、問題を読みます」と、設問を意識するコメントしかあらわれていない。下線がある設問の場合、答えの多くは下線付近に出てくることが多いという認識があるためか、この被調査者の場合、設問に出てきた言葉で止まり、設問を意識している。しかし、Cタイプの設問の場合、文章全体の理解ができていないと解答できない類の問題なので、その付近だけを見ても答えは分からないはずである。この被調査者はこの後設問の選択肢を黙読するが、解答はせずに続きの文を読み始めた。読了後に設問に解答しているが、結局正答できていなかった。

このように、10番の学習者はCタイプになると一文一文をしっかりと理解しようという意識が働かなくなる。Bタイプの設問を与えられた場合は、【先行文脈とのつながり】と【解釈・説明】が共にあらわれ、特に設問の下線付近では【解釈・説明】が増えることから、下線付近を中心に理解を深めよう意識するが、Cタイプのように下線がなく、大きな意味のまとまりで理解が求められるような設問を与えられると、何を中心に理解をしていけばいいのかわからなくなるのだと思われる。

(2)学習者5の事例

学習者5はAタイプとCタイプの設問を与えられ、文章を読んでいる。

まず、Aタイプで学習者5が使用しているストラテジーで最も多いのは【読み飛ばし】で、合計17回、全体の23.3%を占め、次に【モニター】が10回(13.7%)、【置き換え】11回(15.1%)、【再読】9回(12.3%)、【設問への意識】8回(11.0%)と続く。

表7の発話データからも分かるように、5の学習者は設問で問われている部分に関わるか否かという基準で読む箇所を判断するので、【モニター】や【設問への意識】が多くあらわれる。必要ないと判断すると【読み飛ばし】が起き、設問に出てきた言葉が見つかったら、きちんと読もうという意識から【再読】する。再度読んでも意味が分からない場合は、もう1回読もうと自分の読みを【モニター】している。これらの発話行動からは、文章の内容理解のためではなく、設問の答えを見つけるための読みになっているといえる。文意の理解を述べる【解釈・説明】はこの学習者の場合1回(1.4%)のみであり、その代わりに母語への【置き換え】を多く用いているのだが、それらは単語・文節レベルでしかあらわれておらず、範囲の狭い局所的な理解に留まっていると思われる。

Aタイプの設問は、本文中の問いの下線の前後に

表7：学習者5 設問Aタイプでの発話

No.	ストラテジー	発話
1	本文音読	子どもの頃に描いた絵を、
2	読み飛ばし	覚えているだろうか。
3	モニター	多分これは順番で読まなくていい。正解だけ見つけてもいいと思う。
4	読み飛ばし	……子どもの描く絵は、まるでピカソの絵のようである。
5	読み飛ばし	3歳くらいの子どもの描く人の絵は、人体の形をまったく無視したもので、
6	設問への意識	あ、問題にあった、チェック。
7	本文音読	頭から手と足が出ていて、
8	設問への意識	足と手がある、だからこれ(注：設問1の選択肢2)はない。
9	本文音読	胸やお腹の部分がない。
10	読み飛ばし	子ども向けの漫画のようなこの
11	本文音読	不思議な人の絵は、日本の子どもたちが、
12	読み飛ばし	漫画をまねして描いているわけではない。
13	設問への意識	不思議な人の絵、さっき不思議、不思議って言葉が出てきたから、チェック。はっきり読む。
14	再読	子ども向けの漫画のような、漫画のような、ま、子供達が漫画を、真似して、子供たちがまねを、
15	モニター	よくわからないから、もう1回。
16	再読	日本の子どもたちが、漫画を、まねして、日本の子どもたちが、…わけではない。
17	モニター	…よくわからないから、後ろの文から、見て。

正答があるため、設問解答が目的の読みの場合、下線付近を中心に読めばよいことになるので、当然読み手の理解は局所的になる。学習者5の場合も、設問を意識することで読みの方略が左右され、文章全体を読まずに答えに関わる箇所しか読まないで、結果として理解できる範囲が狭くなってしまふのだと考えられる。

それでは、もう一方のCタイプの設問が与えられた場合はどうだろうか。まず、使用しているストラテジーはAタイプで最も高かった【読み飛ばし】の回数が2回(3.4%)に減少している。【置き換え】(11回、18.6%)や、【再読】(8回、13.6%)は依然として多くみられる一方、文意を述べる【解釈・説明】が7回(11.9%)に増えている。また、Aタイプではなかった【世界知識】【予測】【内容に関する疑問】も少数ながら観察され、Aタイプに比べ、さまざまなストラテジーを使用しながら読んでいることが分かる。

表8は学習者5のCタイプの設問での発話データである。Cタイプの設問はAタイプのように本文中

に設問の下線がないため、問われている部分に惑わされることなく、一文ずつなぞるような読み方になっており、【読み飛ばし】は起きていない。本文冒頭「機内のトイレでは～」といわれているのに「の」から3「だから、吸った、だれか」と誰かが機内のトイレでタバコを吸っていることを【予測】し、本文4「なぜか飛行機のトイレには灰皿がある」から、5「灰皿があるのは喫煙者のため」だと本文の内容を詳しく述べる【内容の精緻化】があらわれ、その後6「(それは)ちょっとおかしい」と【内容に関する疑問】が続く。そして、14「航空会社は～「絶対の信頼」をおいていないのだ」から、15「(航空会社が乗客を)信頼したら、灰皿はなかった」と【情報の再構成】を行い、この文章の要点に関わる部分に対しても理解を深める発話がみられる。

このように、5番の学習者はCタイプでは読み飛ばしをせず、一文一文をさまざまなストラテジーを用い、理解を進めていることが分かる。

表8：学習者5 設問Cタイプでの発話1

No.	ストラテジー	発話
1	本文音読	「機内のトイレでは絶対にタバコを吸わないでください」といわれているのに、
2	再読	いるのに、
3	予測	だから、吸った、だれか、
4	本文音読	なぜか飛行機のトイレには灰皿がある。
5	内容の精緻化	灰皿があるのは喫煙者のため。
6	内容に関する疑問	ちょっとおかしい。
7	本文音読	乗客が吸えない規則があるなら、
8	再読	吸えない規則、
9	解釈・説明	規則が(注：規則で)すえないから、
10	本文音読	灰皿はないほうがいいと思う。
11	感想・意見	当然。
12	本文音読	しかし、
13	文法の確認	しかしだったら、逆の内容が、
14	本文音読	航空会社は乗客に対して「絶対の信頼」をおいていないのだ。
15	情報の再構成	はい。絶対信頼、信頼したら、灰皿はなかった。
16	本文音読	以前、いぜん、過去の話、客室座席の一部に喫煙してもよい座席があった。
17	感想・意見	あったら、他の場所、禁煙者、禁煙者にはちょっと迷惑じゃないかと思う。

しかしながら、文章中盤で機内のトイレの灰皿がある理由が火災を防ぐためだということが分かると、それ以降は設問を意識するような発話が目立ち、文意を理解する発話はみられなくなる(表9)。

以上、学習者5の場合、Aタイプの設問では答えとなる箇所を中心に読み、他をおざなりにするため、

理解の範囲が狭くなるが、Cタイプでは読み飛ばしが起きない分、辿り読みになることから、使用するストラテジーの種類も増え、理解を積み重ねる読み方になる。しかし、ここでも設問が頭を離れないため理解が制限され、結果的には深い読みには至らないのだと考えられる。

表9：学習者5 設問Cタイプでの発話2

No.	ストラテジー	発話
84	本文音読	トイレのゴミ箱には自動消火器があ〜、備えられるようになった。
85	先行文脈とのつながり	禁煙だけど、禁煙だけど、設置されている、
86	設問への解答	あ〜、これはまる。だから4番が、たぶん。
87	本文音読	また、トイレ内には、煙探知機が設置されており、
88	設問への意識	あ〜、これも、2番の、3番、3番の、あ、2番、
89	本文音読	タバコから出る煙を感知すると、ものすごい、
90	設問への意識	あ、おなじ内容、
91	読み飛ばし	音量の警告音が鳴るようになっている。
92	読み飛ばし	これだけの装備をしても、なお、
93	保留	ま、単語の意味は分からないけど、ま、たぶん、
94	本文音読	天井の煙探知機が煙を感知しないよう手でふさぐなどしながら、うまく喫煙しようとする、 とんでもない乗客がいる。
95	設問への解答	3番の正解は4番。

(3) 学習者7の事例

学習者7はAタイプとBタイプの設問を与えられ、文章を読んでいる。

使用しているストラテジーはAタイプ、Bタイプともに【再読】、【保留】の順で多く用いられている。理解に躓いた際に起きる【再読】は、Aタイプで28回(42.2%)、Bタイプでは33回(29.7%)、理解を試みるものの放棄する【保留】はAタイプで11回(16.7%)、Bタイプで18回(16.2%)といずれも極端に多く、この学習者は最終的に十分な理解に辿りついていないと予想される。

表10のAタイプの設問での発話データを見ると、

学習者7は、分からない語彙に出会い、意味の推測を試みて躓き、保留するケースが多いことが分かる。この学習者の語彙力の不足は深刻であり、計11回の【保留】のうち9回が語義の保留である。その後も保留のまま当該文の文意を理解する発話はみられず、【再読】→【保留】→次の【本文音読】に移るといったパターンが全体として観察される。また、設問の下線部分で読みを止め解答しているが、ここでも【設問への解答】の発話はみられても、当該文の文意を述べる発話はない。この学習者が文意の理解に苦戦していることは、Aタイプで【解釈・説明】が合計5回しか観察されていないことから裏付けられる。

表10：学習者7 設問Aタイプでの発話

No.	ストラテジー	発話
19	本文音読	子ども向けの漫画のような、
20	再読	ような・・・子ども向けの漫画 漫画のような、
21	本文音読	この不思議な人の絵は、日本の子どもたちが漫画をまねして描いているわけではない。
22	再読	子ども向けの漫画のような、のような、この不思議な人の絵は、日本の子ども達がまんがをまねして描いている、
23	保留	まねしての意味は分かりません。
24	再読	まねして描いているわけではない。
25	本文音読	実はこのような絵には「①頭足画」という名前がついている。
26	本文音読	世界の国の子どもたちが皆この年齢に描く絵のスタイルなのだ。
27	設問への意識	じゃ、1番の質問を答えます。
28	設問音読	「頭足画」とは何か。
29	設問音読	(1.) 不思議な人を描いた絵。
30	設問音読	(2.) 頭と手足がない絵。
31	設問への解答	それはない。
32	設問音読	(3.) 子どもたちが漫画をまねして描いた絵。
33	設問音読	(4.) 人体の形をまったく無視した絵。
34	設問への解答	うーん。(35秒沈黙) たぶん(11秒沈黙) たぶん4番。答えは、人体の形をまったく無視した絵。
35	設問への意識	・・・・・・たちがみんな スタイル(下線の後の文を読み直している)・・・・・・
36	本文音読	なぜ、世界中の子どもたちが皆こんな不思議な人物画を描くのか、はっきりわかっていない。
37	再読	はっきりわかっていない。

A タイプの設問は下線の前後に答えとなる箇所があり、理解をしていなくても解答できる可能性があるが、裏を返せばそれだけ理解の深さを制限するおそれもある。この学習者は、もともと語彙力の不足に加え、A タイプの設問によってさらに理解を制限されてしまっていると考えられる。

一方、B タイプの設問を与えられ読んだ場合、A タイプ同様、語彙の問題による【再読】、【保留】は依然多いものの、自己の読みの理解を表明する【解釈・説明】(13回、11.7%)を多く行っている点で、A タイプの場合と読み方が異なっている。A タイプでは語

彙の意味が分からず保留し、結局当該文の意味も理解しないまま次の文へと進む読み方であったが、B タイプでは語義が分からないなりに文意を理解しようと試みている様子が観察される。

表 11 の発話データでは、まず「可燃物」の意味が分からないものの、55「紙みたいなもので火災が起りやすいもの」と推測している。そして、次の文では「乾燥状態」の意味が分からず保留するが、一つ前の文の「トイレの中には可燃物が多いため」と結び付けて71「トイレの中に可燃物が多いので、すぐに大きい火事に発展する」という理解に到達している。

表 11：学習者 7 設問 B タイプでの発話 1

No.	ストラテジー	発話
52	本文音読	トイレのなかは紙などの可燃物が多いため、火災が起りやすい。
53	解釈・説明	もちろん、トイレの中に紙がたくさん、たくさんあって、あのなにか、・・・。
54	モニター	あの「可燃物」の意味がよく分からないけど、でも、これを読んだら、たぶん分かるようになる。
55	語義の推測	「可燃物」は日本語で何か。紙みたいなもの？火災が、なにか、おこりやすいもの？たぶんそれは可燃物。
56	内容の精緻化	だから、トイレ、トイレでタバコを吸ったら、とても、なにか、危ない、・・・です。だからあ のう。
57	本文音読	機内はいつも乾燥、
58	再読	あー、この乾燥、機内はいつも乾燥、
59	保留	乾燥の意味は分かりません。
60	再読	いつも乾燥。
61	保留	あとこの2つの漢字の意味は分かりません。
62	再読	機内はいつも乾燥なにに、
63	本文音読	状態なので、一度火がついたら、短時間で大火事に発展するおそれがあるのだ。
64	再読	機内はいつも、・・・かんそう、・・・
65	保留	うーん、分かりません。それはなにか、
66	モニター	なにか、意味が分かります。
67	漢字の読み	でも、乾燥と、その、漢字の読み方(注：状態の読み方)は分からない。
68	再読	機内はいつも、でも機内は～。
69	再読	うーん。一度火がついたら。
70	モニター	これは全部分かる。
71	解釈・説明	なにかトイレの中に可燃物が多いので、あとう一度火がついたら、短い、なにか、すぐ、大きい、 大きい火事に、発展する、こと、です。

また、読んだ文に何らかの情報を加え詳しく説明する【内容の精緻化】が【解釈・説明】の次に多くみられ、計8回あらわれている。表 12 のように【内容の精緻化】は【解釈・説明】と結びついてあらわれることが多く、発話全体で6回観察された。特に設問①の下線部以前にみられ、4回出現している。設問①は、現在もトイレの機内に灰皿がある理由として喫煙席があった時代の「名残」の意味を問うもので、以前は喫煙席が設けられていたことや、喫煙席の乗客がくわえタバコでトイレに入ってしまうことがあったこと、その場合の処置として灰皿が置かれたことなど、文章冒

頭からの情報を蓄積していかないと解答できない。そのためには文の明示的な意味だけではなく、自分なりの解釈を付け加えて記憶していく必要があり、このストラテジーが活性化したのだろう。設問 A タイプのような下線の前後を参照するのではなく、段落を超えるような広範囲での理解が求められる B タイプの設問によって、記憶を保持させるような読み方になったのだと考えられる。

以上、学習者 7 は、A タイプの設問では広範囲での理解が求められない分、語義の解釈を保留したまま、本文と設問の語の対応関係を探りながら読み進める傾

表 12：学習者7 設問 B タイプでの発話2

No.	ストラテジー	発話
1	本文音読	「機内のトイレでは絶対にタバコを吸わないでください」といわれているのに、なぜか飛行機のトイレには灰皿がある。
2	解釈・説明	それは、なにか、ほんとに、はいざら？たぶんそれはあのおう、飛行機のお客様に、あのおうタバコを絶対に吸わないで下さいと、あのおう言っているのに、あのおう、あっ？でもでもでも、あ、トイレの中に。でもそのあのおうトイレには灰皿があります。
3	内容の精緻化	それは、なにか、 反論 (contradiction) があります。
4	内容の精緻化	でもたぶん、うーん、なにか、・・・えー、たぶん、これ、あのおう、かぎじゃない。火災、火災が起これないように、あのおう、トイレの中に、あのおう、灰皿があります。
5	世界知識	なにかなにか、いつ、どこへ行っても、なにか、悪い人、あまり良くない人もあるから、あのおう、その、なにか、そ、その、なにか、あまり良くない人、もしその人が、あのおうトイレの中にタバコを吸ったら (注：吸ったら)、あのおう、なにか、・・・安全、安全で、タバコを吸おう (注：吸う) ために、あ、安全に、安全にタバコを吸うために、あのおう灰皿が今。

向になるが、Bタイプの設問では広範囲の理解が要求されるため、それまでの文脈を記憶に置きながら、今読んでいる箇所を【解釈・説明】や【内容の精緻化】によって自らの記憶に合うように解釈して読み進めるため、自身の足りない語彙力を脳内の内容スキーマや形式スキーマによって補うようになり、自然と理解が深まると考えられる。

4. 総合考察

本研究では、異なるタイプの設問を与えられ文章を読んだ際に、読解に困難を抱える学習者の読みの方略にどのような影響が及ぶかについて、学習者の発話事例から分析を行った。

結果を設問タイプごとにまとめると、以下のようになる。

- (1) Aタイプの設問を与えられた場合、理解の範囲は狭くなり、また設問の答えに関わる箇所を中心に読むことにより読み飛ばしが起き、その結果理解が進まなくなる。
- (2) Bタイプの設問を与えられた場合、理解の範囲が広がり、文意の理解を述べる【解釈・説明】ストラテジーが活性化され、これに【先行文脈のつながり】や【内容の精緻化】などの高次処理ストラテジーが結びつくことによって記憶が強化され、理解が深まる。
- (3) Cタイプの設問を与えられた場合、理解の範囲が広がり、文章全体の意味を構築しようと高次処理ストラテジーは働くものの、設問で問われているポイントが漠然としているために理解の焦点化が困難になり、うまく理解に結びつかないことが多くみられる。

読解成績下位者5名の筆記再生課題の評価の結果で、どの学習者も設問Bタイプの場合で相対的に評価が高くなっていた。したがって、上手に文章を読めない学習者には、Bタイプのような段落を超える理解を促す設問によって、文章中の情報同士を結びつけるようなストラテジーを活性化させ、理解への橋渡しを図ることが重要であると考えられる。広範囲での理解を促すという点でいえば、Cタイプでも同様の効果がありそうだが、学習者の発話からは、自分の経験と結び付けたりするものの、Bタイプのように設問に下線がないことから、どこをポイントに置いて読めばいいのか分からない様子や、設問に出てくる単語に反応し、それに惑わされるために理解が制限されてしまう様子が見られた。要求される理解の範囲が広すぎるため、かえって漠然とした読みになり、首尾一貫した理解の構築が困難になったのだと思われる。

読解指導の示唆として、今回取り上げた3名の学習者について個別にみていく。まず、語彙力が不足していた学習者7にとっては今回使用した文章はレベルに合っていなかったと思われる。Bタイプでは理解を積み重ねていく読み方をしていたが、設問によっていくらか読み方を変えたとしても、それが結果的に正しい理解につながるとは言いきれない。学習者の言語力にあった文章を与え、それが難しい場合には語彙リストを与えるなどの支援がまずは必要となるだろう。

つぎにAタイプの設問によって読み飛ばしが起きていた学習者5には、読みをいわゆる「さぼらせない」工夫が必要になる。理解を促進するための設問ということ考えた場合、Aタイプのような理解に制限を与えてしまう設問ばかりを教師が与えるのでは、学習者はいつになっても深く読めるようにはならない。今回学習者5はAタイプの設問では文章を丁寧に読まなかったが、設問に出てきた言葉が本文のどこにあるかと意識しながら読んでいたことを考慮すると、Bタ

イプのように選択肢を本文中の表現とは異なるものに変えて提示することで、一文一文をきちんと読もうとする意識が働くのではないだろうか。

最後に、Cタイプで読むポイントが分からず漠然とした読みになっていた学習者10の場合は、自己の理解を振り返りモニターできる機会を与える必要がある。そのためには要求する理解の範囲を狭め、段落単位での理解を促す設問を与えていくことが解決へとつながるだろう。また、何を中心に読めばいいのかという点については、設問で何を問うかということを考える必要がある。例えば、話の筋を追えるような設問や要点を問うような設問などを与えることで文章の流れや重要な情報を見抜く目を養い、読解力を高めていく方策などが考えられよう。

3名の学習者に対する質的考察を一般化するには限界があるが、文章理解を促進する設問という面では一定の示唆が得られたと考える。今後さらに対象とする学習者を増やし、異なる内容の文章や設問を用いた質的調査を重ねることで考察を深めたい。

<引用文献>

- 菊池民子 (2004) 「日本語学習者の読解における「読みのスタイル」の多様性 - 使用ストラテジーの観点から -」『言語文化と日本語教育』27, pp.144-156、お茶の水女子大学日本言語文化学会
- (2006) 「よい読み手の読解過程に見られる特徴 - ストラテジー連鎖の視点から -」『言語文化と日本語教育』31, pp.1-10、お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 金城直美・池田伸子 (1996) 「物語文理解における挿入質問の効果に関する実験的研究—ハイパーメディア教材開発のための基礎的研究—」『世界の日本語教育』6, pp.1-12、国際交流基金日本語国際センター
- 佐藤礼子 (2001) 「日本語の文章理解過程における問いの役割—英語を第一言語とする日本語学習者を対象として—」『教育学研究紀要』47 (2), pp.358-362、中国四国研究学会
- 館岡洋子 (2001) 「読解過程における自問自答と問題解決方略」『日本語教育』111, pp.66-75、日本語教育学会
- 山田裕美子 (2016b) 「設問のタイプの違いが読解中のストラテジー使用に与える影響—中級日本語学習者を対象に—」『一橋国際教育センター紀要』7, pp.57-69、一橋国際教育センター
- Kamhi-Stein, L.D. (2003). Reading in Two Languages: How Attitudes Toward Home

Language and Beliefs About Reading Affect the Behaviors of “Underprepared” L2 College Readers. *TESOL Quarterly*, 37, 1, pp.35-71

<材料文出典>

- エラワン・ウイパー (2005) 『ジャンボ旅客機99の謎』 pp.203-205 二見文庫
- 山口真美 (2007) 『正面を向いた鳥の絵が描(か)けますか?』 pp.61-63 講談社+α新書

参考資料1：材料文

子どもの絵

子どもの頃に描いた絵を、覚えているだろうか。子どもの描く絵は、まるでピカソの絵のようである。

3歳くらいの子どもの描く人の絵は、人体の形をまったく無視したもので、頭から手と足が出ていて、胸やお腹の部分がいない。

子ども向けの漫画のようなこの不思議な人の絵は、日本の子どもたちが漫画をまねして描いているわけではない。実はこのような絵には「頭足画」という名前がついている。世界の国の子どもたちが皆この年齢に描く絵のスタイルなのだ。

なぜ、世界中の子どもたちが皆こんな不思議な人物画を描くのか、はっきりわかっていない。しかし子どもがこのような絵を描く理由には、物事をよく見て理解するという「認識能力」の発達が関係していると考えられている。

つまり、ふつうの人物画を描く前に、このような「頭足画」を描く時期があり、それは絵を描く能力の発達だけではなく、認識能力の発達も表すものなのである。「絵を描く能力」と、「世界を認識する能力」は深く関わっているのである。

大人目からすると変な絵だが、「もっときちんとした絵を描いて」とこのような絵を描くことを禁止して、むりに写実的な人物画を描くように言うてはいけない。絵は、写実に描くことがいいわけではないのだ。

写実に絵を描く前に、イマジネーションが爆発する時期があるのだ。

幼稚園の子どもの絵でよくあるものに、シンボルのような太陽が描かれているものがある。しかし実際の太陽はそんなふうには観察できない。

もっとクリエイティブな絵になると、見えないはずのものまで描いてあったりする。たとえば卵を半透明にして中に鳥の子どもの描いたりするような絵だ。

こうした表現は7歳頃まで続くそうである。

子どもが描く絵には、絵の歴史を感じるものがある。

絵とは、決して外の世界をそのまま写すものではない。その人がもつイメージを描くことから始まり、外界を現実のとおり描く方向へと発展するのである。そして子どもの絵には、「どのように世界を見て理解しているのか」という発達の様子がそのままあらわれているのである。

トイレの灰皿

「機内のトイレでは絶対にタバコを吸わないでください」といわれているのに、なぜか飛行機のトイレには灰皿がある。乗客が吸えない規則があるなら、灰皿はないほうが良いと思う。しかし、航空会社は乗客に対して「絶対の信頼」をおいていないのだ。

以前、客室座席の一部に喫煙してもよい座席があった。そこでの喫煙だけは許されていたが、その時代でも、他の座席や通路、さらにトイレも絶対禁止だった。しかし、喫煙席の乗客の中に、うっかりタバコを持ったままトイレに入ってしまう人がいた。持ち込んだタバコの処分に困り、トイレのなかにでも捨てられたら大変である。

そこで、そうしたケースにタバコを捨てる場所として、灰皿がとりつけられていたわけだ。いまだにトイレに灰皿があるのは、その名残である。

だから、これを読んでいる皆さんは、機内のトイレで灰皿を見つけても、「ここで喫煙してもいいですよ」

という意味に、誤解しないでほしい。

トイレのなかには紙などの可燃物が多いため、火災が起りやすい。機内はいつも乾燥状態なので、一度火がいついたら、短時間で大火事に発展するおそれがあるのだ。実際、機内の火災事故で最も多い出火場所はエンジンでもブレーキでもなく、トイレなのである。

灰皿があることから、絶対禁煙と承知していながら、トイレで隠れてタバコを吸う者もいる。しかし、もっとひどいのは、灰皿の有無とは関係なく、トイレで喫煙する人たちだ。「機内全面絶対禁煙」となってから、トイレの灰皿をとり去ることも考えられた。しかし、現実にはトイレで喫煙する乗客がゼロにならない限り、灰皿を除去できないと、航空会社は判断したのである。

「隠れ喫煙」の乗客は、少ないながらも存在している。そのため、トイレのゴミ箱には自動消火器が備えられるようになった。また、トイレ内には煙探知機が設置されており、タバコから出る煙を感知すると、ものすごい音量の警告音が鳴るようになっている。これだけの装備をしても、なお、天井の煙探知機が煙を感知しないよう手でふさぐなどしながら、うまく喫煙しようとする、とんでもない乗客がいる。

タバコをめぐる航空会社と「隠れ喫煙者」とのいたちごっこは果てしなくつづく。

参考資料2：被調査者20名の評価（得点結果）の詳細

順位	ID	国籍	性別	所属	設問の割り当てと評価		平均	レベル
1	2	中国	女性	大学院研究生	A (14.0)	B (14.0)	14.0	上位
2	16	韓国	女性	日本語学校生	C (14.0)	A (13.7)	13.8	
3	13	オーストラリア	女性	大学学部交換留学生	B (12.7)	A (13.7)	13.2	
4	17	韓国	女性	日本語学校生	C (13.7)	B (11.7)	12.7	
5	14	ロシア	女性	大学学部研修留学生	B (11.0)	C (10.3)	10.7	中上位
6	18	韓国	女性	日本語学校生	C (10.0)	B (11.0)	10.5	
7	1	台湾	女性	日本語学校生	A (11.7)	C (9.3)	10.5	
8	19	ブラジル	女性	大学院研究生	C (8.7)	A (11.3)	10.0	
9	3	中国	男性	大学学部生	A (8.7)	C (10.7)	9.7	中下位
10	6	韓国	女性	日本語学校生	A (7.0)	B (12.0)	9.5	
11	8	台湾	男性	日本語学校生	B (8.0)	C (9.0)	8.5	
12	20	フランス	男性	大学学部交換留学生	C (8.3)	A (8.3)	8.3	
13	15	韓国	女性	日本語学校生	C (4.7)	B (11.3)	8.0	下位
14	4	韓国	女性	日本語学校生	A (6.7)	B (7.7)	7.2	
15	12	ポーランド	女性	大学院研究生	B (3.7)	C (9.3)	6.5	
16	7	キューバ	男性	大学院研究生	A (4.3)	B (7.7)	6.0	
17	5	韓国	男性	日本語学校生	A (1.7)	C (8.0)	4.8	下位
18	9	韓国	女性	日本語学校生	B (4.7)	A (4.0)	4.3	
19	10	韓国	女性	日本語学校生	B (4.3)	C (2.0)	3.2	
20	11	韓国	男性	日本語学校生	B (3.3)	A (2.7)	3.0	